

## 平成27年度卒業式及び平成28年度入学式の学長式辞

石 本 勝 見

### はじめに

平成27年度の卒業式の式辞では、本学の建学の精神「業学一如」について、実践の中で学び、またその学びを実践に生かしていくことの意義について触れながら生涯学び続けることの大切さを伝えた。

また、英国の首相であったマーガレット・サッチャーの言葉を引用して、時に厳しい現実社会を「帆の張り方」を工夫することで乗り越えてほしいことなどを話した。

また平成28年度の入学式では、「加茂朝学校」の精神に触れながら、自らの主体的な意志を大事にしながらこれからの大学生活を送って欲しいことなどを伝えた。

### 平成27年度卒業式 式辞（原稿）

卒業式を挙げるに当たり、ご多忙のところ加茂市長小池清彦様、田上町長佐藤邦義様、元本学学長長塚康弘様はじめ多数のご来賓の皆様から御臨席いただき誠にありがとうございます。

保護者・ご家族の皆様、本日は本当におめでとうありがとうございます。卒業を迎えられた喜びと同時に、肩の荷を一つおろしたような、ほっとした思いも感じておられるのではないかと拝察いたしております。

さて、卒業生の皆さん、卒業おめでとう。ここに至るまで、日々の学習に、実習に、そしてミュージカルの練習・発表によく頑張ってきました。その努力を心から讃えたいと思います。いよいよ社会人として、社会の中で活躍する 때가来ました。

学校を卒業するということは、社会で、とりわけ専門的な職業に就こうとする人にとって、大学での学びは、その社会への入場券、入り口に入るに必要な知識・技能を習得したに過ぎない、と言ってもいいかもしれません。

たとえ本学での学びが終了したとしても、今度は、実際の社会で、現場で、仕事の中で、実践を通して学び続けることが、とりわけ専門的な職業に携わる人には求められている、と思います。

ここで、仕事と学び、実践を通じての自己成長を考えると、本学の建学の精神「業

学一如」、の教えが思い起こされます。学んで実践し、実践の中からさらに深い気付き、発見があり、そしてそれを今までの学びに付け加え、修正し、それをもって果敢にまた実践の場に戻る、その繰り返し、そのサイクルの大事さ、継続し続けることこそ「学び」であり「実践・仕事」をする、という事ではないか、本学の建学の精神「業学一如」の教えには、このような意味が含まれているのではないか、と思うのであります。

特に、日々成長・発達を続ける子どもにかかわる保育者、広い意味での教育者は、自らもまた不断に自己を磨き高める努力をし続けることが求められていると思います。

どうか、本学で学び卒業される皆さん、卒業が学びの終わりではなく、更に仕事の中で、終わりのない学びをしっかりと継続し、専門職として成長し、社会人として生きていって欲しいと思います。

もう一つ、皆さんに紹介したい言葉があります。イギリス初の女性の首相として有名なマーガレット・サッチャーさんが、自分の子どものころに大きな影響を受けた言葉として、日本の新聞で紹介されたものです。

「同じ風に吹かれながら、一隻の舟は東に、もう一隻の舟は西に向かう。どちらに進むかを決めるのは帆の張り方で、風のせいではない」という言葉です。

ややもしますと、人生でうまくいかない、思い通りにいかない時に、我々は、環境が悪い、あの人がこうだから等々その要因を外部に求める傾向があります。確かに、自分の意思、力だけでは変えようがない、いわば運命的なものがあることも経験的に承知していますが、しかし、たとえ同じ風が吹いていても、舟が東に向かうか、あるいは正反対の西に進むかを決めるのは帆の張り方、つまり自分がどっちに行きたいのか、その自分の意思である、という事です。

もちろん、風の方向と逆に進む、ということは、風の強さや、全体の状況、舟の速度や位置などを検討し、相当に慎重に帆の張り方をしなければならないことは当然のことで、困難な作業であることは十分予想されます。

ここで私が卒業生の皆さんに言いたいことは、これからの人生で順風もあれば逆風が吹くときもあるでしょう。逆風のときに、どう踏ん張るか、乗り越える力をどう引き出していくか、です。サッチャーが紹介してくれた言葉は、あるいは、うまくいかない時に、ここ一番の時に勇気を与えてくれるかもしれません。よく「今の若者は打たれ弱い」などと言われることがあります。うまくいかない時、困難なときにどう対応したらいいか?それを乗り越える力は、自分のこれまでの失敗体験や、その失敗を乗り越えてきた経験によって身についてくる、と考えられますが、自分の人生で出会うであろうすべての事態を、実際に事前に経験することは不可能です。

言いたいことは、どうか自分の人生で、たとうまくいかないことがあったとして

も、自分を信頼し、最善を尽くすと同時に、自分に不足している力は他者から助けてもらう、共に助け助けられ、勇気をもって生き抜いてほしいと願っています。その力は本学での学びのプロセスで十分身につけていると確信しています。

どうか、自分が幸せになると同時に、共に生きている他者が幸せになれるように、自分自身が成長すると同時に、自分がかかわる子どもやすべての人が自分らしく成長発達できるように、自分がウエルビーイングに生きると同時に、すべての人がウエルビーイングになれるように、社会の中で地域の人々と共に生きていってください。皆さんの今後の活躍を祈り、期待しつつ学長としての式辞とします。

平成28年 3月15日

新潟中央短期大学 学長 石 本 勝 見

## 平成28年度入学式 式辞（原稿）

本日ここに平成二十八年度新潟中央短期大学入学式を挙げるに当たり、加茂市長小池清彦様、田上町長佐藤邦義様、元本学学長長塚康弘様はじめ多数のご来賓の皆様から御臨席をいただき、誠にありがとうございます。

ただいま本学への入学を許可された皆さん、入学おめでとう。ここから歓迎します。

また、ご家族・保護者の皆様、本日は本当におめでとうありがとうございます。私ども教職員は、全力で学生を支援し教育に当たる覚悟であります。保護者の皆様におかれましても、本学への温かい御理解と御支援をよろしくお願い申し上げます。

さて、ご承知の通り、私ども新潟中央短期大学は、ここ、系列校であります新潟経営大学に隣接して、新しく生まれ変わりました。この光輝く新校舎に最初にお迎えるのが皆さんです。この快適なキャンパスで皆さんと一緒に学ぶことができる喜びを私も感じています。

本学は、幼児教育科ができて以来30有余年、多くの卒業生が地域の保育園、幼稚園、福祉施設等で活躍し、それぞれ高い評価を得ております。その歴史と伝統を踏まえ、加茂市希望が丘に新たな一歩を踏み出した、「新生新潟中央短期大学」の新しい学風を創っていくのは皆さんです。皆さんと共に、教職員も心を合わせ、地域の皆さんに信頼され、期待される大学を創っていきたいと思っています。

さて、本学の教育の根底を支える最も大切な理念は、加茂朝学校の理念と実践に求められる、と思っています。それは、学ぶ意欲・意志のある者は、たとえどんな困難な環境にあったとしても、学びの意欲を燃やし、人間としての成長を遂げ、学びの成果を実践し仕事に活かすと同時に、さらに学び・実践し、また学びを継続し、より深く自己を磨き続けてほしい、という精神、願いである、と思っています。

どうか皆さん、他律ではなく、自律、自ら主体的に学ぶ意志、覚悟をしっかりと持って、学んでほしいと思います。

もう一つ、皆さんにお話ししたいことがあります。ご承知の通り、本学は保育者養成をその目的にしていますことから、保育者として必要な知識・技術等をしっかりと学んでほしいことは勿論ですが、保育者という専門職を支えている、人としてのあり方、社会で、所属するコミュニティーで、他の人々と共に生きていくためのマナー、お互いが気持ちよく生きていくための対応のあり方、コミュニケーション、ソーシャルスキル等、これまで身につけてきた力、スキルをさらに磨きをかけていただきたい、と思います。

私どもも皆さんの夢の実現、皆さんの可能性の開花のために、しっかりと応援して

平成28年度入学式式辞（原稿）

まいります。

この新しい、快適な学び舎で、共に学び、共になりたい自分に向かって、一步一步進んでいきましょう。

以上、学長としての式辞といたします。

平成28年4月3日

新潟中央短期大学 学長 石 本 勝 見

- 1 日 時 平成27年4月3日(金) 午後1時30分から
- 2 会 場 本学体育館
- 3 入学者 84人（内3人社会人）

# 新潟中央短期大学の存続・持続、更なる発展を目指して

新潟中央短期大学 学長 石 本 勝 見

## はじめに

本学は、大正9年9月10日、曹洞宗大昌寺の西村大串師によって設立された加茂朝学校を源流として今日に至っている。建学の目的は、公民に必要な教育、および曹洞禅による修養を施すことにあり（加茂暁星学園加茂暁星高等学校同窓会誌 暁鐘 平成13年）、その教育は「師弟同行」の教育であったという。（加茂暁星高等学校創立90周年記念誌 同校同窓会長中山勇氏発刊あいさつ 平成22年）

昭和43年に暁星商業短期大学が設立され、昭和56年に校名が加茂暁星短期大学に変更され、同時に幼児教育科が併設された。

本学の更なる発展を想う時、建学の精神と熱いところ、幾多の困難にもかかわらず此処まで繋いできてくれた先人たちの努力を深く心に刻むとともに、そのバトンを次につなげていかねばならない。

今後とも、地域社会から信頼され必要とされる大学となるためには、どこに注目し、どのように進めていくべきか、考えてみたい。

## 1 存続・持続、発展するための基本的要件

- (1) 教育基本法は、大学は社会の発展に寄与するものでなければならない、としている。新潟県に存在する本学は、まず新潟県の地域社会の発展のために力を尽くすことが求められている、と言えよう。
- (2) 本学が今後共に存続・持続、発展するためには、地域社会から信頼され、必要とされる存在でなければならない。そのための積極的な努力が不断になされる必要がある。
- (3) このことのためには、大学で行われるあらゆる活動が、結果として、社会から認められ、肯定的な評価をうけるべく行われる必要があり、その活動は、意識的であるか無意識的であるかを問わない。このことに資する活動の広報、情報発信はもとより大切であるが、その中身・内容は普段日常的に行われている、すべての大学の活動であり、この点こそが基本的に重要である、と言える。

## 2 現状の評価（主要な面について）

### （1）物理的側面

平成28年度から系列大学の新潟経営大学に隣接して、いわば一体的に新校舎、キャンパスが完成した。様々な困難があったにもかかわらず今後の発展の礎として、新しい教育・研究の拠点ができただことは、今後の発展にとって大きな意味があると評価できる。在学生からも、また地域の外の皆さんやオープンキャンパスに来てくれた高校生からも、明るくて快適だとよい評価を得ている。ただし、新しい教育機器等の普及など、現状では十分対応しきれない課題が生じることもあり得るので、そのための改善、対応は必要になってくる。

### （2）物理的側面以外の側面

#### ア 職員

近年、大学運営において、教員以外の職員、いわゆるスタッフ職の重要性が高まってきた。限られた人数ではあるが、事務方トップの事務長はじめ全員がそれぞれの役割をしっかりと果している。ただ、定員100人の新しい状況の中で、今後の存続・持続、発展を展望する時、企画、募集、広報、学生支援（実習業務も含めて）等の強化が求められる。

#### イ 教員

現在の教員数11人は、短期大学設置基準で定員100人の場合の基準を満たしているがぎりぎりの数である。今後より充実した教育研究を実施していくためには量、質ともに強化する必要がある。

#### ウ 教育・研究

教育の面では、その方法において、学習者の主体的な活動を重視する方向が鮮明になってきている。「実践に強い」保育者の養成の面から、各教員は現場の課題等を積極的に授業で取り上げ、学生自らが考え、まとめていく学習方法等（アクティブ・ラーニング）をすでに取り上げ実施しているがさらに改善工夫が求められている。また研究面では、国の科学研究費を得て継続的に研究を進めている教員（共同研究も含めて）もいる。

#### エ その他

本学の良い評価を高めていると思われる活動等については、すでに30回以上連続して公開している「短大ミュージカル」があげられる。地元の加茂、田上等の地域の皆さんにはよく知られているが、例えば県都新潟市では必ずしもそうではない。我々の「よさ」を積極的に訴えていくことは今後の発展のために有効であると考えられる。また、地域の保育園、幼稚園等を対象にした「出前保育」も好評であり、地域に喜ばれる大学として、継続していくことが望まれる。



### 3 今後の課題・方向性

#### (1) 定員の確保

本学の存続・持続、更なる発展のためには、その基盤として運営に必要な財政的基盤を確立することが重要であることは論を待たない。平成28年度から100人に増員したが、当該年度は残念ながら入学者は85人で充足できなかった。29年度は確実に定員を確保するため、補欠入学制度を導入することとした。今後も確実に定員を確保するための方策として、学生募集業務を担当するスタッフの強化を図る必要がある。

#### (2) 教育内容の充実

##### ア 本学が養成する保育者像の明確化と共有化

まず教育内容の充実を考える場合、進むべき方向性をこの際はっきりさせ、その方向を教職員がしっかりと確認し共有し、心を合わせ、力を合わせて進むことが大事であると思われる。

イ 上記アを踏まえて、ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）、アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）を一体的に策定する。

#### (3) 大学、高校との連携

新潟経営大学とはすでに図書館をはじめ食堂、学生相談関係など一体的に運用されているが、学生部関係の、学生の安全安心確保、学園祭等の一体的な開催等今後強化すべき課題も残されている。

また暁星高校との関係では、一部短大の校舎・教室を高校が利用するなどの連携はあるが、さらに踏み込んで、講義、授業の面などでも交流、連携が可能か等検討することもいいのではないかと考えられる。

#### (4) その他

##### ア 事務部門の一体的業務の検討

今後の学校法人加茂暁星学園の更なる発展を展望する時、学園の管理運営業務の中核機能（ガバナンス機能）としての法人本部の強化を含め、大学・短大・高校の管理・総務的事務の一体化をはじめ、企画・広報、学生・生徒募集、実習・就職業務等々の業務を統合することのメリット等を検討することも必要ではないと思われる。

##### イ 周年記念について

平成29年度は、暁星商業短期大学が設立されてから49年、加茂暁星短期大学に幼児教育科が設置されてから36年、新潟中央短期大学に校名変更されてから31年になる。周年記念行事の検討は、今後の本学及び加茂暁星学園全体の発展を展望する中でなされる必要があると思われるが、高校、大学も含めて、法人全体で検討することがよいのではないかと考えられる。



### おわりに

大学の存在理由は、特に地方に存在する大学は、つづめて言えば日本全体を含め、地域社会の発展に貢献することにあるといってもいいのではないかと考えています。したがって、その地域社会からの信頼や期待が低下すれば、大学の存立自体が危うくなる。その信頼や期待に応えられるよう、不断に大学職員が心を合わせ、力を合わせて努力を続ける必要がある。